
記憶の森

sarsha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の森

【著者名】

NZマーク

N56770

【あらすじ】

記憶とは儚いものである。何を覚え、何を忘れるのか。今こそ、記憶を呼び覚ます時。

序章

私が今から話すことは、もうどれくらい昔のことか分からなくなる昔の事だ。だからこそ、人々の記憶の中から消え去り、私が語ることが出来ない事となつた。

その遙か昔、3人の勇者がいた。

1人は陸を愛する勇者メモリアント

1人は海を愛する勇者シーザライス

1人は空を愛する勇者スカイロン

この3人が出会った時から、歴史の歯車は、ゆっくりと回り始めた。幾度の困難を乗り越えた3人の勇者は、出会いのしるしに、3本の木を植えた。

1本はメモリアントにより陸に

1本はシーザライズにより海に

1本はスカイロンにより空に

その3本の木は、枯れる事の無い”記憶の木”と名づけられた。しかし、3人は自分の手で未来を掴むために、それぞれ旅立つた。そして、やがて国ができた。

陸の国メモリアント
海の国シーザライス
空の国スカイロン

3人は再び集まり、共に同盟を組んだ。そして、誓つた。毎年1

回、集結し、共に杯を交わそう、と。けれども、月日というものは酷いもので、その誓いの記憶もだんだん薄れていった。

人間という生き物は、己の欲望に溺れる者だ。どこの世にも、どこの時代にも、世を乱す者がいる。殺しては奪い、殺されでは奪われる。ただ、それを繰り返すだけ。3つの国は互いを傷つけ、自分を傷つけていった。

”記憶”というものは、とても影響力をもつものである。しかし、”記憶”というものは儚いものもある。人間の”記憶”はすぐに薄れ、忘れていく。3人の勇者ですら、人間たちの”記憶”の中では、”かつての英雄”でしかない。

私から見れば、人間なんてちっぽけな存在だ。”かつての英雄”、メモリアントは言った。

「我々人間は小さな存在であり、愚かで、何も出来ない。だからこそ、群れで行動するのである」

人間は過去から何も学ばない。過ちから、何も学ばない。やはり、私から見れば、人間は愚かな存在なのだ。争いを繰り返し、傷つきあつた3つの国は、次第に互いの国のこと忘れていった。

陸には、縁豊かなメモリアントがあつたことを。
海には、光り輝くシーザライズがあつたことを。
空には、美しいスカイロンがあつたことを。

幾千年の時を重ねるうちに、それぞれの国は別の道を歩むことになる。

人間の”記憶”が薄れていく中、語ることが出来るのは私だけ。しかし、それももう出来なくなる。私には、「危機」から逃れる力はない。

そして、現在。諦めかけていた私の前に、奇跡が起きた。再び、3国が手を結ぶときがきた。私は、手を差し伸べて助けることは出来ない。

しかし、私はその3人の勇者に、賭けてみることにした。どのように3人が、この冷え切った世界を変えるのか。その先に待つ未来は、平和な世の中になるのか。

ここに今、私の”記憶”に新しい歴史が刻まれる。”記憶の森”に迷いし3人の勇者よ。この世を変えてみよ。そして、これから訪れる、史上最大の危機を、乗り越えてみよ。

第1章 （1）森の中

追われる。

追つてくる。

何か、とてもなく大きいものが。

ふと立ち止まるが、周りは木しかない。

ここは、何処？

誰か、

助けて

深い森の奥。かつての英雄、メモリアントが植えたといわれる“記憶の木”のある森の奥。俺はそこに、たった一人で住んでいる。

そのせいか、他の人間との関わりはゼロに等しい。と言つか、関わりを持つ気もない。だけど、生きるために何かと必要な物もある

るわけで。例えは食料であつても、森で自分で見つけなければいけない。時には狩りなんかをする。

今日だつて、たまたま無くなつた薬草と、たまたま無くなつた干し肉をつくる為の肉を手に入れるためにたまたま森の中を歩いていただけなのに。

「どうして俺は…」

女人を拾つてしまふんだろう。

とりあえず家へと運ぶ。見て見ぬ振りをしておけば良かつたものを。だけど、後々恨まれたら嫌なだけだ。その女人の着ているドレスは所々破れていて、裸足の足は泥だらけだつた。だけど、顔立ちはキレイ。もしかしたら、どこかのお偉いさんの御令嬢かもしれないと。

面倒くさいことになる前に、この人が目覚めたらさつさと帰つてもらおう。そんなことを考えながら、食料を手に入れることがなく、女人を手に入れる羽目になつた。

俺が住んでいる家のベッドに女人を寝かせると、女人を家の中に残し、俺は外へ出た。外はすでに日が暮れ、見上げる空には、今にも降り注いできそうな星が輝いていた。見渡す限りの木々と星。この他には何もない。ただ、無情に時だけが流れる。かつての英雄、メモリアントが

「我々人間は小さな存在であり、愚かで、何も出来ない。だからこ

そ、群れで行動するのである」

なんて言葉を残している。そんな言葉、たとえ、かつての英雄の言葉であっても、俺は信じない。もし、俺がこの世に言葉を残すのなら、こう残す。

「我々人間は卑劣な存在であり、自分を守るためなら、何だつてする。だからこそ、他人を傷つける」

ガサガサッ、ガサッ…ガサッガサ

普段、静かなこの森に、何者かの気配が漂い始めた。野犬か？魔物だつたら最悪だ。俺は一旦家へ入り、玄関に立て掛けおいた剣を手に取ると、再び外へと出た。

すると、先ほどとは違つ気配を感じた。ただの気配だけではない。重たく、邪悪な気配を背負つた殺氣。木々の間から、その無数の殺気が飛んでくる。数は多そうだ。ゆっくりと目を閉じる。神経を集中させ、その殺気を読み取る。野犬でも、魔物でもない。

この殺気は…

「覚悟…！」

目を開けた瞬間、数人の兵隊が剣を俺に向けて突進してくる光景が目にに入った。俺は咄嗟にジャンプし、後ろに下がつた。それでも尚突進してくるその兵隊たちに、嫌気が差した。兵隊たちの殺気は恐ろしく鋭い。俺は剣を右手で持ち、その場で空気を左から右へ斬ると、両手で持ち高い位置から振り落とすと、地面に突き刺した。

その瞬間、突風が吹き、兵隊たちは吹き飛び、尻餅をついた。兵隊たちは素早くたちあがり、再び俺に向かつて来るが、もはや無駄だった。俺の前には見えない壁が聳え立ち、兵隊たちは何度も何度も跳ね飛ばされていた。

「貴様つ…姫様をどうするつもりだ！」

「姫様？」

一番強そうな兵隊が、地面に倒れながら俺に鋭い視線を送つてきた。

「知らない振りをしようつて…王族を誘拐することは、し、死刑に値するぞ！」

「誘拐？」

この兵隊の言つてることがさっぱりわからなかつた。地面に突き刺さつている剣を抜き取ると、その兵隊はゆっくり近づいてきて、俺の足首を掴んできた。

「…放せ」

その兵隊を見下ろすと、冷たい言葉と共に蹴り飛ばした。人の領地に勝手に踏み込み、その上、人を誘拐犯呼ばわり。怒りは頂点に達していた。この兵隊たちの始末をどうするか。そんなことを考えていると、森の奥から馬の蹄の音が聞こえてきた。音をよく聞いてみると、どうやら馬は2頭のようだつた。俺は再び剣を右手に持つと、やってくる何者かに備えた。

「これはこれは、もしかして、貴殿は噂の呪われた子、いや失敬、ロビン・アンソニック様では？」

「へえ…兄上、この人と面識あるんですか」

森の中から、白馬と黒馬に乗った2人が俺の前に現われた。2人とも腰には見事な細工の施された剣を差していた。馬の装飾も凄いもので、いくつもの大きな宝石で飾られていた。

「お前ら、誰だ？」

いかにもどこかの王族であろう身なり。しかし、たとえ王族であろうと、誰であろうと、俺には関係ない。早くこの領域から出て行って欲しい。

「失礼、名乗りもしないで。わたくしはメモリアント国第一王子、ウェルト・アルフレット」

「同じく、メモリアント国第一王子、ノヴァン・アルフレット」

2人は馬の上から、無残にも倒れている自分の軍隊の兵隊たちを見下ろした。

「さて…わたくしの可愛い妹はどこに?？」

「姉上を、どこへやつたのですか?」

兵隊たちはようようと起き上がり、2人の後ろに整列をし始めた。俺はしばらく考えていた。

姫様？王族？誘拐？可愛い妹？姉上？

俺はようやく頭の整理がつくと、無言で家中へ入って行つた。その後を、馬から下りたウェルトとノヴァンがついてきた。そして、家中へ入ると、俺は横たわっている女の人の頬を軽く叩いた。何回か叩いているうちに、女的人は気が付いたようだった。

「ソフィアン！」

「姉上！」

ウェルトもノヴァンも俺を跳ね除けると、そのソフィアンとかいう人に駆け寄つた。すると、ウェルトが腰から剣を抜き、俺にゆっくりと近づいてきた。

「王族を誘拐…。ロビン様には度胸があるようで。我が城まで来ていただけますか？」

来ていただけないのならば、いくらあなたが呪われた子であつても、この剣があなたの血に染まるだけ

俺は何も言わずに寛立っていた。じつとウェルトを見る。ウェルトも目を逸らさない。

すると、ドタバタと家中に兵隊たちが入ってきた。ウェルトはそこでやつと目を逸らすと、その兵隊たちに田で合図をした。合図を受けたであろう兵隊が、俺の後ろに回ってきて、腕を掴んだ。次に、他の兵隊がロープで手首を縛り、俺が何もできないようにした。俺は抵抗しなかつた。ただ、じつとウェルトを見るだけ。

「…」

小さな声は、震えながら発せられた。

「姉上！ノヴァンで『ゼロ』ます！お氣づきになられましたか？」

「…ノヴァン？」

続いてウェルトが話しかける。

「ソフィアン。私だ、ウェルトだ」

「ウェルト？」

そのやりとりを聞いていた俺は、妙な感覚を覚えた。ソフィアンを盗み見すると、もうすっかり気が付いているようだった。それなのに、会話が疑問系だ。

「もしかして、記憶が無いんじゃないの？」

何気なく発した俺の一言で、ウェルトもノヴァンも、兵隊たちも一気に俺を見た。ウェルトは再びソフィアンに話しかけた。

「ウェルト、ウェルト・アルフレット…わからないのか？」

ソフィアンは返事をしなかつた。今度はノヴァンが剣を引き抜いた。

「貴様つ！姉上に何をした！？ただでは済まぬぞ！」

「…ノヴァン」

ウェルトが、昂つているノヴァンに落ち着いた声で話しかけた。
それでもノヴァンは俺に突つかかってきた。

「姉上が、我が国にとつてどれほど重要なお方が知らぬのだな！？
今、この世の」

「ノヴァン！」

俺に切りかかろうとしたノヴァンを、ウェルトは一喝して止めた。

「しかし兄上！」

「とりあえず、ロビン様には城まで来ていただく。ソフィアンも、
城に連れて帰る」

ウェルトがきつぱりと言つと、ノヴァンは俺を睨みながら剣をし
ました。

一夜にして、俺は犯罪者という濡れ衣を着せられ、厄介な事に巻
き込まれてしまつたらしい。しかし、これはただの始まりにすぎな
かった。いや、これ以前から、俺の運命は動き出していたのかもし
れない。忌まわしい、「呪われた子」という肩書きが、俺の運命を
狂わした。

(2) ロビン・アンソニック

過去を語るのは、私の役目のようだ。もちろん、私は「呪われた子」ロビン・アンソニックの生に立ちを知っている。私の記憶のほんの一部でしかないが、大事な記憶もある。

ロビン・アンソニック。彼は、小さな町ルルーホントの小さな農家に生まれた子だった。皆から愛され、アンソニック家は幸せで溢れていた。しかし、彼が生まれたその夜。本当に風の強い、嵐の夜のことだった。1人の魔法使いが、アンソニック家に現われた。その魔法使いはアルフィー・ソード。ロビンの母レアンは、その魔法使いにこう言われた。

「その子を今すぐ手放しなさい。私に渡すのです」

しかし、レアンは頑として渡そうとしなかった。生まれたばかりの可愛い息子、手放せるわけがない。

「この子は、大事な息子です。何故、素性を知らないあなたに渡さなければならないのです?」

レアンは家の扉を閉めようとした。だが、相手は魔法使い。その魔法使いは、レアンを押しのけて家中に入った。強引に入ってきた魔法使いは、ロビンに近づくと、袖から杖を出し、ロビンの額に押し当てた。

「呪われし子よ……汝の背負いし運命に従い、その使命を頼べせ。我

の力、汝に与える」

眩い光が家中に漏れ、その光から目を逸らしたレアンが目を開けた時には、その魔法使いは消えていた。レアンは急いでロビンに駆け寄るが、ロビンは何事も無かつたかのようにすやすやと眠っていた。

さて、ここまでには彼の運命の始まりに過ぎない。続きの話はその夜の出来事から、さらに1ヶ月ほど経った頃の話になる。母レアンは突然やってきた魔法使いを気に掛けながらも、ロビンを育てていた。いつものように夫は農場へと出掛け、レアンはロビンを寝かしつけ、家で織物をしていた。

そこで、遂にレアンはある魔法使いの言葉の内容を知ることになる。太陽が真上に昇る少し前。ドアを激しくノックする音が家中に響き渡つた。ロビンが起きてしまわぬよう、レアンはすぐに客人を出迎えた。しかし、そこにいたのは客人ではなかった。あの夜にやつてきた魔法使いとは別の魔法使いだった。

「私の名はヴォルデオ。あなたが、レアン？」

「え、ええ……」

私は、ヴォルデオも知っている。彼についても私の記憶の一部として語ることは出来る。しかし、彼について語るには少々時間が掛かることが予想される。そう、少し厄介な魔法使いなのだ。彼についてはまた、話す機会があればそこで話そう。失礼、話がそれてしまつたようだ。

「以前、1人の魔法使いが訪ねてきたはずなのだが……ご存知かね？」

「沃尔デオは図々しく家に上がり、ロビンの寝ているベッドまで近づいた。

「ええ、1ヶ月ほど前でしょうか？あの、一体この子は…」

遂にここで、レアンは沃尔デオにロビンに隠された秘密を聞いてしまったのだ。沃尔デオは口元を緩めると、レアンを抱き上げて言った。

「この赤ん坊は呪われた子。重たい十字架を背負っているのが見える。この子を手放さなければ、この家にも災難が降りかかるだろ？ 私に、渡しなさい」

その話を聞いても、レアンはロビンを手放そとはしなかった。それが、沃尔デオの怒りを頂点まで引き上げることとなってしまったのだ。ルルーエントは本当に小さな町。噂が広がるのは早かつた。魔法使い沃尔デオによって囁かれた噂は、一気にルルーエントの町民に知れ渡った。噂には尾ひれがついて町中を彷徨つた。そして、沃尔デオがアンソニック家に現われて数日後のこと。遂に、ロビンの、呪われた子としての運命の歯車が回り始めてしまった。

「悪魔の子、ロビンを殺せ！」

「悪の魔術師の息子め、町に不幸をもたらすな！」

「呪われた子、ロビンを生かしておけない！」

沃尔デオによつて操られた町民によつて、アンソニック家は囲まれた。その光景だけは、いまだ私の記憶に鮮明に残つてゐる。

町民は、アンソニック家に火を放つた。勢いよく燃え盛る炎の中、レアンはロビンを護り、家の真ん中でロビンを抱きしめていた。

「これは、ヴォルデオがロビンを手にいれたいがためだけに起こったこと。ルルーエントの町は荒れ、アンソニック家は燃え尽きた。何故、そこまでしてヴォルデオがロビンを手に入れたかったのか。それを語るのは、まだ少し早いだろ？」

業火の中、ロビンは生き残っていた。レアンは酷い火傷を負い、数日間苦しんで、息を引き取った。父親も、町民によつて殺されてしまった。荒れ果てたルルーエントにやつて来たのは、最初にアンソニック家にやつてきた魔法使いだった。そのルルーエントの様子を見て、その魔法使いは杖を取り出した。魔法使いは、杖を振る。

「命よ宿れ。我が杖に従い、命よ、吹き返せ」

その言葉と共に、木々には青々とした葉がつき、荒れた野原には野草が咲いた。魔法使いは、ロビンを抱き上げた。

「呪われし子ロビンよ。生き延びるのだ。必ず、生きとこの世を変えるのだ」

ロビンのことを「呪われし子」と呼んだのはアルフィー・ソード、そして、ヴォルデオ。何故この2人の魔法使いがロビンのことを「呪われし子」と呼んだかはまた別の機会に話すとしよう。

(3) アルフの街

「行方不明だつたソフィアン王女様がみつかつたそつだよ」

「ビートにいたんだい？」

「それが、”記憶の森”に住むあの呪われた子の小屋にいたんだつて」

「なんてこと！」

「しかも、記憶を失われたそつで」

「ああーあの呪われた子に何かされたに違ひないわーなんてかわいそうなー国王様は気が氣でないでしじょうね、きっと

そんな会話が、アルフレット城がある街、アルフのいたる所でされている。そんな中を、ウェルト、ノヴァンを先頭に、ソフインを乗せた馬車、兵隊たちの行列が通つていた。もちろん、その兵隊の列の中には、後ろで両手を縛られたロビンもいた。俺は別に何も悪い事をしていないのに、と思いながら、ロビンは気だるそうに歩いていた。そのロビンを様子を見て、再び街ではこんな会話が囁かれ るようになつた。

「見た？呪われた子のあの表情」

「ええ、見ましたとも。悪びれた様子もないし、嫌な顔つきだったわよ」

「あまり見るものじゃないわよね、呪われた子の顔なんか」

「大人しくしていればいいものを」

「本当に。H族を誘拐するだなんて、何を考えているのかしら」

「……ちょっとあなたたち、あんまり大きな声で話してると」

会話が聞こえてきたロビンは、行列を見物していた人々の方に目を向け、会話をしていた女を睨み付けた。

「あら嫌だ。こっちを見ないでおくれよ。呪われてしまっわ」

「やだやだ。今日は早く家に帰つてリヤスターの準備でもしようかね」

そう言いながら、女たちはそそくさと家中に入つていった。

リヤスターとは、古くから伝わるメモリアント国の人気行事であり、毎年春に1週間をかけて行われる祭りみたいなものである。

かつての英雄、メモリアントが始めたと言われ、その年1年の繁栄を願い、幸福を祝う。それぞれの家のドアには、それぞれが子孫繁栄、室内安全を願いながら思い思いに作った花のリースが飾られる。リヤスターの時期は街中が花で囲まれ、平和を象徴するものだった。そんな賑やかな街とは反対に、アルフレッド城に向かう一行は緊張感が漂っている。ロビンは依然としてダラダラと歩いていた。

「今日ね、リヤスターの花飾りを作つたのよ。これ、アンタにあげる

！」

道端で、可愛らしい小さな女の子が、男の子にリースを差し出していた。リヤスタのリースは、好きな人に送るのにも使われ、友達同士、恋人同士でも交換されることもある。その女の子も、幼いながらに、気持ちを込めてリースを作ったのだろう。男の子はゆっくりとリースに手を伸ばし、照れくさそうに女の子から受け取った。すると、近くにいた子供たちがはやし立てた。

「おい！見ろよ！ピッグがアリスからリースを受け取ったぜ！」

「ピグノアのピッグが！」

ピグノアは一気に顔を赤くして、もらつたリースから花をむしりとつた。

「俺はピッグじゃない！ピグノアだ！それに、こんな奴からもらつたって、嬉しくねえんだ！」

リースの花を全部散らし、最後に地面に叩きつけ、足で踏んだ。それを見たアリスは、目からたくさん涙を流し、その場にしゃがみ込んだ。はやし立てられたピグノアは、悔しそうに他の男の子たちを睨みつけた。

「おいつーどこへ行く！！」

兵隊が止めようとしたが、ロビンは聞く耳をもたず、アリスとピグノア、そして、男の子たちのところへ歩いて行つた。呪われた子が近づいてきた、といなながら、周辺にいた人々は散つて行つた。

「どうしてお前はピッグって呼ばれてるんだ？」

「鼻が、豚みたいだからって……みんなが言つんだ」

たしかにピグノアの鼻は、少しだけ上を向いていた。ロビンは、鼻で笑うと、両手を縛られたロープをいとも簡単に解いた。というよりも、指を鳴らし、魔法を使って一瞬でロープを切つたようだつた。しゃがみ込み、自由になつた両手で、潰されたりースやむしり取られた花びらを拾い集めた。ロビンがリースの残骸に両手をかざし、目を閉じながらしばらくじつとしていると、次第に残骸が温かく光り始めた。最後に眩しい光が一瞬だけ光つた。

「うわあー！」

アリスは泣くのをやめ、リースを手にとつた。

「元に戻つてゐるー。」

アリスは嬉しそうに笑つた。それを見て、ロビンも小さく微笑んだ。

「アリス！何やつてるのー早くこいつにこらつしゃいー！」

声のする方を見ると、そこにはアリスの母親らしき女性が青い顔をしながら立つていた。明らかにロビンを恐れているのだ。アリスは不思議そうに首を傾げると、母親の元へ走つて行つた。ふとアリスは振り向くと、ロビンに向かつて言つた。

「お兄ちゃんは魔法使いさんなの？」

ロビンはその問いに答えることなく立ち上がると、微笑を浮

かべただけだった。

「アリス！あの人には近づいたりいけません！」

母親はアリスの腕を取ると、足早に家の中へと入つて行った。

「お前たちも家へ帰りな。あと、ピッグ」

男の子たちに向かつて言うと、ピグノアだけを呼び止めた。暗い顔をして、ピグノアは恐る恐るロビンの顔を見た。

「いいあだ名じやねえか。仲良くするんだぞ。みんなもお前のことを嫌つちやいない。羨ましかったんだろ？」

男の子たちは互いに顔を見合せると、ゆっくりと頷いた。ロビンは切り落としたロープを手に取り、再びパチンと指を鳴らすと、後ろで両手を縛り、列の中へと戻つて行つた。

それからしばらくして、街の中心、アルフレット城が見えた。アルフレット城を見た瞬間、ロビンの脳裏にはある魔法使いの顔が過ぎつた。知らない人のはずなのに、どこか懐かしい顔。そして、アルフレット城に近づくにつれて、懐かしい香りがした。

「アルフィ・ソード……」

ロビンは、頭にふと浮かんだその名前を呟いた。アルフレット城の門には、メモリアント国国王アンドリュエル、王妃アナスタシー、そして、灰色のローブを着たアルフィ・ソードが立つていた。

「戻つて來たぞ、呪われた子が。いや、メモリアント国を救つ勇者

が

アルフィはそう言って、にっこりと笑みを浮かべた。

(4) 呪われた子

「一体どうしたことだ!? 説明しろ、アルフィ・ソード!」

「ノヴァン、少しは落ち着け!」

俺は王との謁見の間に通され、両手を縛られたまま突っ立つていた。訳がわからないまま連れてこられたと思ったら、今度は田の前で王子兄弟と、魔法使いのよつなジジイが口論を始めた。

この城に来るまでに田にちをまたいでしまった。昨日の夜の騒動のせいで夕飯も食べそこね、おまけに夜通し歩かされた。嫌な顔になるのもわかつてもらえるだろつ。元から体力はあるから、疲れた、腹が減つた、どうにかしてくれ、とは奴らに頼まない。だけど、人を散々振り回しておいておきながら、放つて置かれるのは気に喰わなかつた。

「あの……」

弟の方は何故だかまだ怒りを露にしていて、兄の方はそれを抑え、ジジイは弟の方に何かを説明していた。それより、俺に説明しろよ、と思いながら、今度は声を荒げてみる。

「……おーーーてめえーー!」

謁見の間に俺の声が響き渡つた。一瞬にして静寂が訪れ、3人が同時に俺を見た。最初に口を開いたのはジジイだった。

「すまない、ロビン。お前には、随分と苦労をかけたと思つておる」

「アルフィ様、わたくしも未だに理解しておりません」

「とにかく！アイツは姉上を誘拐したんだ！即刻極刑に処すべきだ！」

結局振り出しに戻り、ノヴァンは自分の考えを突き通そうとした。その時、謁見の間の扉が開き、王のアンドリュエルと王妃のアナ斯塔シーが入ってきた。ウェルト、ノヴァン、アルフィは口を閉じ、静かに頭を下げた。俺はそんな気はさらさら無く、じつと王と王妃を見ていた。

王と王妃が椅子に座り、その隣にはウェルトとノヴァンが寄り添つて立ち、ジジイは俺から少し離れた隣に立つた。

「ソフィアンは、記憶を失ったようである」

王がゆっくりと口を開き、悲しそうな目で俺を見てきた。この人は、俺を疑ってはいないようだ。田が、そう言つてゐる。

「やはり父上、即刻この者を極刑に処すべきです」

今度はいたつて冷静に、ノヴァンは俺を見下しながら言つてきた。

「ノヴァン、ロビンは、決して誘拐犯などではない」

ウェルトとノヴァンは驚いたように王を見た。特にノヴァンは、王と俺の顔を交互に見、呆れた顔をしていた。

「誘拐犯は、言つならば、ソフィアン王女自身でござるましょ」

ジジイは王を真っ直ぐに見て言った。

俺はジジイの顔を見た。どこか懐かしい顔と声。会った事も無いのに、この感覚は何なんだろう。それに、何故だか俺はジジイの名前を知っていた。ふと頭に浮かんだ、アルフィ・ソードという名前。こいつは一体何者なんだ。

「姉上自身が犯人だと！？」訳の分からぬことを言つた

ノヴァンは意地つ張りなのか、全く聞く耳を持たないようだった。それに比べてウェルトは、冷静に物事を観察している。こんなやり取りをしている最中でも、ウェルトは俺に視線を送り続けていた。その視線は、俺を分析しているようだった。

「先ほどもノヴァン王子殿下にお話し申し上げましたように、ロビンは呪われた子でござります」

「それが何だと聞つのだ」

ノヴァンは呆れながら言った。

「私が言つ“呪われた子”とは、ヴォルデオの言つ“呪われた子”とは、違う意味での言い方であります」

「わたくし、ソフィアンを見てまいりますわ……」

そう言って、静かに王妃が退席した後で、ジジイは再び話し始め

た。

「私の言ひ、”呪われた子”、それは、」これから迫り来る過酷な運命に翻弄される、という意味でござります」

俺はゆっくりとジジイを見た。王もウェルトもノヴァンも、静かに次の言葉を待つた。

「この者は、私の力を持った正真正銘の魔法使いでござります。魔族でも無いのに魔力を持っている。それ故に、呪われた子と言われているようですが、あのヴォルデオは、また違った意味で、この者を”呪われた子”と呼ぶのです」

ジジイはチラシと俺の顔を見ると、再び話し始めた。

「これからメモリアント国に訪れる危機、それは、世界の消滅。そして、それを止められるのは、このロビン・アンソニック。ヴォルデオにとって、この者は悪事を邪魔する厄介者。ヴォルデオの意味する”呪われた子”とは、言葉の通り、ヴォルデオに呪いをかけられた、という意味でござります」

俺は何も言わなかつた。自分の周りで何が起こっているのかわからなかつた。でも、そんなことは関係ない。じつと一点を見つめ、ただただ、早く家に帰れることを願つた。しかし、そんな俺の願いとは裏腹に、もうしばらくここに滞在することになった。

「アルフィイ様！ソフィアン王女殿下がお目覚めになられました！」

謁見の間の扉が勢いよく開くと、ジジイ同様にフードを着た若い

男が飛び込んできた。

「詳しく述べ後ほど。今はソフィアン王女の回復の方が先でございま
す」

「つむ。やうであるな」

ジジイは王に一言断ると、謁見の間を静かに出て行った。取り残された俺は、相変わらず両手を縛られたまま、情けなく立っていた。

「ローベン」

王は俺の顔を真っ直ぐに見てきた。王の瞳は深い緑。瞳は人間の感情の全てを伝えてくれる。

「急にすまなかつた。今日からは、この城で寝起きするとい

「は？」

「急な」と俺は呆気に取られた。まさかここで暮らせともせひ言つのか？信じられなかつたが、王の瞳は真剣そのものだつた。

「ローベンの縄を解いてやれ。それから、窓に通せる密間に通せ

指示された側近は、戸惑いながらも命令に従おつとした。

「父上！あやつなど、牢屋で十分ではないですか！」

「ノヴァン……」

今までの静かだった王が、突然声を荒げた。ノヴァンも驚いたのか、言葉を失っていた。王は手で側近を動かすと、俺は側近にようつて縄を解かれた。そして、謁見の間を出るときだった。今まで口を開じていたウェルトが、俺を呼び止めた。

「ロビン」

俺は立ち止まり、ゆっくりと振り返ってから、睨みつけるようにウェルトを見た。

「お前は、何故生きていたのだ？誰もいない記憶の森で、たった一人、孤独の中を何故？人々から疎まれていたのに何故だ？」

ウェルトの質問を、俺はそのままウェルトに返した。

「じゃあ、お前に聞くが、どうしてお前は生きている？何のため？」

「国を守るために。王族に生まれた以上、国を守る義務がある」

ウェルトは俺の目を見ながらすぐさま答えた。俺はウェルトの答えに鼻で笑った。

「可哀想な奴だな。国の為に生きるなんて、ばかばかしい」

「お前の答えを聞かせてもらひつか、ロビン」

「俺の答え？それは俺自身だ。俺は、ここに俺が存在するから生きる。何と呼ばれようと、俺は俺だから」

(5) 育ての親

ここに来て何日経つたのか。朝、昼、夜に運ばれてくる食事を食べ、柔らかいベッドの上で、魔物が襲ってくるかもしないという万一の場合に備えることなく寝れる。

別に、不自由もないが、俺に合わない生活だった。みすぼらしいからという理由で上から与えられた服も、袖を通すだけで虫唾が走った。何度もここから逃げ出そうと思ったことが。だけど、逃げられなかつた。

ここに来た日の夜、客間に備え付けられた窓を開け放ち、空を見上げた。ふと下を見たとき、ものすごい高さにこの部屋があることを知ったものの、俺ならなんとかなるか、と安易に考えて窓に足を掛けた。そして、いざ飛び立とうとした時、目の前には見えない壁があるかのようにして俺を遮つた。顔面から思いつきりぶつかつた俺は、うずくまって痛みを堪えていた。

「逃げ出しあなんて甘い考えは捨てた方がいいであろう。逃げ出したところで、ウォルデオに見つかるのも時間の問題だ」

痛みを堪えながら見上げた先には、ドアが開いた音もしなかつたのに、ジジイがローブを身にまとつて立つていた。

「……どういうことだよ? てか、てめえ、人のこと変なことに巻き込みやがつて!」

「てめえ、か……仮にもお前を8年間育てた育ての親であるぞ。私

の名前はアルフィ・ソード。国王直属の魔法使いだ

「俺を、育てた？」

懐かしい感じもする。だけど、だからと言つて、アルフィが俺の育ての親だという証拠はない。俺はまじまじとアルフィの顔を見た。

「お前に魔力を授けたのも私だ。老いぼれだからと言つて、私をあなどるでないぞ」

アルフィは持っていたローブの袖から杖のような杖を取り出ると、杖を振つて、俺が開けた窓を閉めた。続いて空中でもう一度、2度杖を振ると、俺とアルフィの間に、テーブルと椅子が2脚、そして、もう一度杖を振つたところで、ポットとカップが現れた。

「まあ、座れ」

そう言つてアルフィは俺に杖を向けて振ると、体が勝手に動き、無理矢理椅子に座らされた。杖でポットを叩くと、勝手にポットが動き、ティーカップに湯気が出る熱い紅茶を注いだ。

「さてと、準備は整つた。それで、質問は何だね？」

俺は呆気にとられて何も言えなかつた。

「それでは私から質問しよう。お前の名は？」

「そんなの、知つてゐるだろ。ロビン、ロビン・アンソニック」

「そうであった。近頃物忘れがひどくな

そんなこと明らかに嘘であるのに、アルフイは声をあげて笑った。

「しかし、それ以外に、ロビン・アンソニックに関する情報は何があるのだろうか……」

「……」

「小さなルルーホントという村に生まれ、生後間もなく両親を亡くす。

それからお前の記憶はどうこへ行つた？」

物静かに話し続けるアルフイは、時折紅茶を飲みながら、俺の目を見ずに窓の外を見ていた。

「魔力を授けられたが故に、村人やこの国の者から疎まれ、呪われた子と呼ばれる羽目になった。ヴォルデオに呪われ、自分の運命に呪われ、呪われるばかりじやのあ」

「その一つの元凶はアルフイだろ」

「ぼそつと言つた俺の言葉に、アルフイは笑いながら、これは失礼」と言つた。

「……記憶を失くしておる……ソフィアン王女のよひに」

俺は口を閉ざしたまま、紅茶にも手を付けなかつた。アルフイは2杯目の紅茶を注ぎ、カップを持つたまま言つた。

「記憶とは儻いものだ。人はすぐに忘れてしまう。だから過ちを繰

り返す。しかし……」「

アルフィは俺の顔を覗きこんだ。

「記憶を取り戻すことも出来る。お前が望むなら、お前の過去を取り戻すことも出来る」

「何が言いたい？」

「お前の住んでいた森は、記憶の森と呼ばれてある。その記憶の森を、記憶の森と呼ぶ理由さえもわからぬまま、そう呼んでおる」

「だから……何だって言つんだ？」

俺がテーブルを勢いよく叩いて立ち上がった瞬間、俺のカップが倒れ、紅茶がテーブルを伝つて床にこぼれた。

「かつての英雄の話は知つておるな？かつての英雄メモリアントは、この国に、枯れる事の無い木を植えた。それが、記憶の木。その記憶の木には、様々な記憶が刻み込まれておる。もちろん、ロビン、お前の記憶も、じや」

黙つたまま、俺はただただアルフィを見つめるだけだった。

「行つてみるか？その、記憶の木のある場所へ」

それつきりだった。それつきり、アルフィが俺の前に姿を現さないまま数日が経つた。

結局、ヴォルデオとか言つ魔法使いについても聞き出せずに、テーブルと椅子だけ残して、アルフィーはドアを使わずに部屋から消えた。窓から星空を眺めていると、森が恋しくなる。恋しくなるなんて言うと、柄には合わないけれど。

毎日生きていくのがやつとな生活でも、何年もやつていると、それはそれで居心地のいいものだった。時折、魔物に出くわす時もあつたけれど、いつもあの剣で倒してきた。ふと思い出したのは、ソフィアンを助けた時に使つた剣だつた。いつも家の入り口に立て掛けにおいて、何かあるとそれを使つていた。

いつから持つていてるのかはわからない。それに、強大な魔力が宿つてゐる事は俺にでもわかる。あの剣も、アルフィーの物なのだろうか。わからないことだらけの俺は、一層森が恋しくなつた。

呪われた子がどうだとか、そんなことは関係ない。俺は俺だ。だから、こんなところに留まつてゐるわけにはいかない。早くここから出たい。そう、心の底から思つたときだつた。

「そろそろ、森が恋しくなる時か？」

後ろを振り向くと、そこにはアルフィーが立つていた。

深い青の瞳。すっと吸い込まれそうなほど透き通つてゐる。銀色に輝く長い髪は、後ろで一つに束ねられている。首からぶら下げる、瞳と同じ色の宝石のペンダントは、アルフィーの動きに合わせて輝く。何もないこの部屋の空間で、アルフィーは圧倒的な存在感を放つていた。

「今から、あの木の場所へ行く。お前も来なさい」

そう言つて、アルフィイは手に持つていいた黒いロープを俺に投げ渡した。少しホコリっぽい氣もしたけれど、それくらいが俺には丁度良かった。

「丁度よかつた。聞きたいことがいろいろとあつたんだ。それと、その場所へ行く前に、俺の家に寄つてくれないか？」

「……別に構わない。彼らが良いと言つならば

「彼ら？」

アルフィイはニコッと意味深な笑顔を浮かべると、今度はドアを使つて部屋の外へ出た。城の門までアルフィイの後を歩いて付いていくと、そこには見覚えのある馬が2頭、それに馬車が1台、そして、その馬車の前には王子兄弟がいた。

(6) 存在

暗闇の中、先頭のウェルトとノヴァンの灯りと、田の前を行く馬車の灯りを頼りに、俺とアルフィイは最後尾で馬に乗った。

俺は黒毛の馬に乗り、黒いロープを羽織つて、フードまで頭からすっぽりと被ると、完全に闇に溶け込んでしまったような気分に陥つた。

皮肉にも、呪われた子という愛称がぴたりな格好だった。このまま、存在を忘れられそうになる。このまま、俺さえも自分の存在を忘れそうになる。いつその事、ここから逃げ出そうか。

闇に逃げ込めば、誰にも干渉されることなく、自分の時間を流すことが出来る。存在が、消えてゆくようだつた。いや、最初から俺は存在していなかつたのかもしれない。とにかく、存在してはいけないんだ、俺は。

「魔力に呑まれるな。そのロープには強力な魔力を掛けている。お前を、ヴォルデオから隠すためだ」

白馬に乗ったアルフィイが、俺と並んで馬を操る。アルフィイの言葉で、頭を占領していたもう一人の俺が姿を消した。

「聞きたかったんだよ……その、ヴォルデオとかいう魔法使いが、俺に何をするつて言うんだ」

黒いロープが疎ましい。早く脱ぎ去りたかった。重たくのしかか

る負の力。

「ヴォルデオ・スピニキオン。奴は3つの世界を自在に行き来する」との出来る数少ない魔法使いの1人だ」

「3つの世界だと? 何だ、それ」

馬鹿馬鹿しくて聞いていられなかつた。世界は一つ。しかも、それがこそがこの世を支配しているメモリアント国のこと。3つの世界なんて、意味が分からなかつた。

「私も詳しく述べ知らぬ。それを、今から聞きに行くのだ」

「何だよ。知らないなら、最初からやつと言えよ」

リズムよい馬の蹄の音に揺られながら、俺たちはさうぞ森の奥へと入つていいく。

「記憶の木に近づいたことはあるか?」

「あるわけねえよ。第一、どの木がその木だなんて知らないんだよ」

それからはひたすら沈黙だつた。時々襲つてくるもう一人の自分は、何も無い世界に俺を引き込もうとしてくる。

俺は必要のない子。

生まれてきていけなかつたのに、どうして今生きているのだろう。それは、俺が俺としてこの世に存在しているからだ。だけど、その命は望まれなかつた命だ。生きているだけ無駄なのか。いや、

命がある限り生きるべきだ。何も期待されていないのに生きていいいのか。期待などなくとも、俺は……

俺は？

俺は、どうする？ どう、生きていいく？ 誰もいない、誰も助けてくれない。嫌だ。助けて。

ボクハヒトリダ……

(7) 記憶の木

「ロビン…！」

ハッと気付いた時には、アルフイが俺の腕を強く掴んでいた。

「……お前の家に着いたぞ」

そう言われ、周りをゆっくりと見渡すと、木造の小さな小屋が建っていた。俺の家だ。額から滲み出た変な汗を拭うと、馬から降り、ウェルトとノヴァンの冷たい視線を感じながらも家に入った。

いつの間にか太陽も顔を覗かせ始めていて、小屋の中はうつすらと明るかつた。ドアを開けてすぐの所にいつも立て掛けている剣を手にし、ベッドの横に置いてあつたベルトを腰に巻いてから剣を差した。

森の中を、太陽が照らす。すっかり明るくなり、夜は不気味なこの記憶の森も、お伽話に出てくるような、妖精が飛んでいそうな、そんな森に見えた。

「着いたようだな、これが、かつての英雄、メモリアントが植えたと言われている、記憶の木だ」

気付けば、目の前には大きな木が聳え立っていた。大きいなんてものじゃない。その存在だけで人を圧迫する。何か、大きなエネルギーが体に伝わってくる。俺は、何かに取りつかれたかのように馬

を降り、その木に近づいて行つた。周りが何を言つてゐるかもわからない。ただただ、その木のことしか考えられなかつた。恐る恐る、その木に手を伸ばす。

(よく来た。若き勇者、ロビン・アンソニックよ)

「何?」

(お前を待つていた。ここで、じつと、幾千年の時を)

「どういう意味だ?」

手を伝つて、微かな振動と共に声が体に染み込んでくる。

(最大の危機が迫つてゐる。3つの世界を守つていた我々が消滅すると共に、世界が、消える)

「……」

(陸の国メモリアント、海の国シーザライス、空の国スカイロン)

「何のことだ?俺にはさっぱり」

(この世界には、3つの世界が存在する。お前たちの知らない、他の世界)

「おい、ボソボソと何を呟いている

急に肩を掴まれたと思ったら、一気に視界が開けて見えた。木に手を伸ばしていた時は、木しか視界に入らなかつた。ウェルトは怪

訝そうに俺を見ていた。

「ウヘルト、待ちなセー」

そう言つて近づいてきたのはアルフィだつた。アルフィは俺たちの横に立つと、俺と同じように木に手を伸ばした。

「久しぶりじゃのあ、メモリアント。お前の声、皆に聞かせてやれ」

アルフィがそう言つた瞬間、アルフィの手が眩しく光つた。

『アルフィよ、ずいぶんと久しぶりじゃないか。私の話を、聞きに来たのか』

今度はウヘルトたちにも声が聞こえるようになつたようで、ウヘルトやノヴァン、兵隊たちほどよめいて騒がしくなつた。俺はじつと、木だけを見つめていた。

「それもだが、できれば記憶を返してもらいたい」

木はしばらく黙つたままだつたが、しばらくしてから声を発した。

『よからう。ただし、私の話を聞いてからだ』

「かまわんよ。時間は、たっぷりある」

そのアルフィの言葉に、またしても木は黙り込んだ。アルフィの厳しい目は、木を見続ける。

『アルフィよ、時間はないのだよヴォルデオが、他の世界を移動し

始めた』

ざわつと風が吹き、木々を揺らす。すごい勢いで鳥たちが木々から離れていく。雲が森を覆うと、あたりは少しだけ、薄暗くなつた。とてつもなく大きなものが動き出している。そう思った。体の中の何かが俺に警告する。俺の知らない記憶が、俺が忘れてしまつた記憶が、俺に、訴えかける。

オマエハヒトリダ

ボクヲ、コロサナイデ

激しい頭痛が襲ってきて、その場に崩れ落ちた。片膝でなんとか姿勢を保ち、そこからフラフラと起き上がる。俺は何を忘れている?どんな記憶を持っていた?何かを忘れてしまつている。

一体、何を?

『アルフィよ、時間はないのだよ。ヴォルデオが、他の世界を移動し始めた』

「急がば回れと言つのだよ」

気がつけば、俺は変な汗を流して、傍から見たらすごい顔をしていたんだと思う。頭の中で、無い記憶の中をずいぶんと長い間彷徨つていたと思ったのに。しつかり地に足を着けて立つている。

『それでは話すことじょう。私の記憶のほんの一部を』

(8) ヴォルデオ

以前、みなさんにもお話をしたでしょう。遙か昔、3人の勇者がいたことを。陸を愛するメモリアント、海を愛するシーザライス、そして空を愛するスカイロン。

今日お話するのは、以前ロビンの過去を語った時に出てきた、ヴォルデオという魔法使いのお話。そうそう、少し厄介な者だったので、話を省略してしまったのだ。

彼の名前は、ヴォルデオ・スピニキオン。魔法使いの中では、超がついてもよいほどの有名人なのだ。と言つても、悪名高い方で、なのだが。

彼は小さな頃から魔法を得意とした。魔族に生まれたからとはいえ、その魔力は計り知れないものだつた。そんな彼は、魔族からも嫌煙された。必要以上の魔力を持ち、それを爆発させる、言わば、危険物だつたのだ。

両親からも疎まれ、友達もいなかつた。常に独りだつたヴォルデオは、次第に自分の中にある孤独や憎しみを魔力に変えていった。孤独は大きくなればなるほど、力を強力にした。憎しみは大きくなればなるほど、力を増幅させた。人の為の魔術などはいらない。人を傷つけ、壊す魔術を求めればいい。そして、彼の行き着いた魔術が、魔族が言う、いわゆる黒魔術というものだつた。

彼はあらゆる術を駆使して、ある1つの魔術を身に付けた。それが、自由に空間を移動できる魔術。平たく言えば、瞬間移動とでも言えようか。そして、ヴォルデオは、行き着いたのだった。

”他”の世界に。

誰も為し得ない術。孤独と憎しみが生んだ術。孤独が人の温かさを求め、そして、憎しみの無い世界を求めた。しかし、彼の心はそれでも満たされなかつた。そして、最後に辿り着いた彼の結論。

それが、自分以外の存在を消すことだつた。

自分を認めてくれる人がいらないなら、その人たちを消せばいい。自分を受け入れてくれる世界がないのなら、その世界を消せばいい。全てを破壊すれば、自分が否定されることもない。だから彼は、この世を消すことにしてたんだ。私たちを枯らすことで、今までの歴史を、今までの記憶を消すことで、世界を抹消しようとしている。

「それが、俺とどう関係するって言つんだ……俺は何も関係無い！」

オマエハヒトリダ

キエタツテカマワナインダヨ

『関係がある。それは、オマエの中にあるのだよ。メモリアント＝ロビン＝アンソニック』

(9) 回想

「なんでもまたここに？」

「呪われた子だという噂があるのに」

「ほんとうに、アルフィ様は一体何を考えているのでしょうか」

アルフレット城の中を、歩きまわる僕は、どうしてここにいるのかわからなかつた。気が付いたらここで生活をしていて、気が付いたら、僕には両親がいなくなつていた。ここにいる理由なんてわからない。

「両親はあの子が殺したって本当かしら」

「ルルーエント村の人たちも全員、亡くなつていたらしいわよ」

「アルフィ様は、どうしてそんな子供を」

侍女たちの声が、耳に入つてくる。でも、言つてることがイヤイチわからなかつた。僕は何もしていなし、ずっとこの城で住んでいる。そう、アルフィ・ソードが、魔術を教えてくれているんだ。僕は、魔法使い。

「おい、ロビン！早くしないとアルフィに叱られるぞ！」

背後から大きな声で呼ばれたと思ったら、そこにはウェルトが立っていた。ウェルトは僕より3つ年上で、何でも出来る。僕は駆け

足でウェルトの元へと向かう。誇らしげに笑うウェルトの顔は輝いていた。ずっと忘れるこの出来ないような笑顔。そう、忘れない、僕の記憶。

「さて、今日はここまでとしよう。しつかりご飯を食べて、しつかり寝て、また明日、今日の続きをするとしよう」

僕もウェルトも泥だらけで、顔を見合させて笑った。服で顔を拭うと、服も泥で汚れた。

「さあ、ロビン。家に行こうか

「うん……」

ウェルトは城の中へ、僕は森の中へと帰っていく。僕たちの家とアルフレット城は、そんなに離れてはいなかった。それでも、何故か僕は、ウェルトとの間に距離を感じた。

「ねえ、アルフィー

「なんだ」

狭い家中、暖炉の火がパチパチと爆ぜる音と、僕たちが豆のスープをする音しか聞こえなかつた。

「どうして、ウェルトは魔術を習わないの？」

僕はアルフィーから魔術を、そしてウェルトは武術を習つていた。

「お前が魔族で、ウェルトが王族だからだ。王族は、魔力を持たない」

「ふうん」

なんとなく納得して、僕はスープを口に含む。暖炉の火は、ゆらゆらと揺れ、たまに爆ぜる。

「ウェルトには、妹と弟がいるんだよね？」

「ああ、ソフィアンは今年で7つ。ノヴァンは5つだ」

「ソフィアンは僕の1つ下なんだね」

「ああ」

「友達に、なれるかなあ」

その言葉に、アルフィイはああ、と答えなかつた。スープをするのをやめ、アルフィイは僕の顔を見て優しい声で言つた。

「残念じゃが、ソフィアンとは会えないのだが、ロビン」

「女の子だから?..じゃあ、ノヴァンは?..」

この質問にも、アルフィイは首を振つた。

「残念じゃが」

アルフィイは、その言葉しか言わなかつた。何故だか僕は、心が痛かつた。

その日の夜、僕はこゝそり家を出て、一人星を見ていた。

いつもは、アルフィイにダメだつて言われて、僕が寝るまで見張つてるし、夜中に起きても、窓やドアには鍵がかかつていて。だけど、今日だけは、ベッドの横の窓の窓の鍵が外れていた。チャンスだと思って、僕は抜け出したわけだ。

「ほう。星を見るのが好きかね？」

暗闇の中から声がするかと思ったら、闇の中から人が近寄つてくるのがわかつた。

「誰？」

僕は警戒して、半歩後ろに下がる。

「私は魔法使いだよ。アルフィイのお友達」

「そう、なの？」

「ああ、そうだとも」

その人は、頭からすっぽりとフードをかぶり、ローブに身を隠していた。

「星に、願い事かね？」

「うふ。ソフィアンとノヴァンと、お友達になれますようにって

僕は空を見上げて、星を見つめた。無数の星が、夜空に輝く。

「なるほど……しかし、大変残念だな」

「……何が？」

魔法使いは、僕の顔をじっと見ながら、顔を近づけてきた。そして、耳元で囁いた。

「お前は、誰からも好かれやしないよ」

背筋がゾクッとして、僕は固まってしまった。

「お前は、望まれない子。消えたって、誰も悲しんだりしない。お前は独りだ、ロビン・アンソニック」

心がどんどん重たくなる。心がどんどん沈んでいく。自分では支えられないほど膨らんだ悲しみ、孤独。目を見開いたまま、僕は闇の中の一点だけを見つめていた。

「両親もいない。愛してくれる人などどこにもいない。寂しい、悲しい、可哀そうな呪われた子。いつそのこと、殺してあげようか？ 私が」

「嫌だ……僕を、殺さないで」

「どうして？ お前は独りだ。呪われた、忌々しい子め」

耳元で囁く魔法使いの声は、どんどん体に染み込んでいく。体から溢れてしまつほどの悲しみ。

「お前は独りだ。消えたつて構わない」

「僕は独りだ」

どうして僕は生きているの？どうして僕はここにいるの？どうして？どうして？僕は、どうして生まれてきたのだろう？

「ヴォルデオ！ロビンから離れろ！」

鋭いアルフィの声が聞こえてきたかと思えば、目の前を赤い閃光が走った。目の前にいたヴォルデオの顔をかする。微かにフードがずれ、ヴォルデオの頬に大きな火傷の痕のようなものがあるのが見えた。

「貴様！よくも……！」

□元を歪めて、ヴォルデオはローブから杖を出すと、アルフィに向けた。杖の先から蒼い閃光が飛び出し、アルフィの赤い閃光とぶつかって大きな音を立てた。僕は目を大きく見開いて、2人の様子をじっと見ていた。すると、いつの間にか僕の目からは涙が流れていた。

ボクハ、ノゾマレナイコ

ノロワレタ□

「うわああああああ！」

全身を恐怖が襲つた。

『なんでまたここに?』

『呪われた子だという噂があるのに』

『両親はあの子が殺したって本当かしら』

『ルルーエント村の人たちも全員、亡くなっていたらしいわよ』

『アルフィ様は、どうしてそんな子供を』

ノロワレタ口

ドウシティキテイルノ?

気がつけば走っていた。足がもつれて絡まってしまうほど足を速く動かした。行き先は決まっていない。だけど、何かに導かれるよう足は動いていた。

ワスレタイ

ナクシタイ

ボクヲ、ケシタイ

足が動かなくなつた。木の根に躊躇つて、僕は派手に転んだ。痛くなんかない。今は、痛みよりも悲しみの方が大きかつた。何がいけないんだろう。僕のどこがダメなんだろう。何もしてないよ。ちゃ

んと勉強もしてる。『うつ』とも聞いてる。

「うわああああー！ああああー！」

声を上げて泣いた。誰かに気づいてもらえるように。声が枯れるまで泣いた。そして、僕はいつの間にか眠ってしまった。地に倒れたまま。

朝、太陽の光が眩しくて、僕は目が覚めた。うつ伏せのまま、転んだまま、僕はそのまま目が覚めた。鳥のさえずりが不規則に聞こえてくる。ゆっくりと体を起こす。周りを見回しても、ここがどこかわからなかつた。見渡す限り、木しかない。ふと目の前にある木を見た。どの木とも比べ物にならないほど大きなその木だけは、僕に気づいてくれたようだつた。少しづつ少しづつ、ゆっくりとその木に近づく。恐る恐る手を伸ばし、その木に手を押し当てる。何かが体中を駆け巡る。

(その記憶、私が預かるうつ、メモリアント=ロビン=アンソニック)

そこで僕は、再び眠りに就いた。

起きた時には、自分の名前がロビン・アンソニックで、世間からは呪われた子言われて疎まれていることだけを覚えていた。俺は、全ての記憶をメモリアントが植えた記憶の木に預けたのだった。

（思ひだしたが、ロビンへお前の記憶を預かっていた代わりに、お前に私は守つてもひつゝことよつ）

(10) 戻った記憶

「……どうことだよ……」

俺は自分を見失っていた。額から汗が流れる。とても嫌な汗だ。頭の中で、記憶の木に預けていた俺の記憶が、ぐるぐると回っている。今まで預けていた記憶が頭の中に入つてくると、文字通り、頭がパンクしそうだった。

『お前の記憶を預かると同時に、その記憶に関する人物からも、お前の存在を消しておいた』

「私の、記憶までつ……」

チラリと後ろを見ると、ウェルトが苦しそうに崩れていた。からうじて右ひざで体を支えているようだが、俺と同じように額に汗をかいていた。頭を押さえ、痛みと闘っているようだ。数人の兵がウェルトを支えようと近寄ったが、ウェルトはそれを拒んだ。

「ロビン……、出会った時から、初めてではない気がしていた……」

『メモリアント＝ロビン＝アンソニックよ、記憶の代償に、私を守つてくれるのだつたな?』

俺はなんとか体を奮い立たせ、記憶の木に向き合つた。頭の中で、いろいろな声が飛び交っている。10年前に、ここで倒れたことも、今では鮮明に思い出せる。そして、18年前、俺が生まれて間もなく、燃え盛る家の真ん中で、母親レアンが俺をきつく抱き締め、守

つてくれたことも。ここにいるジジイの記憶も、ウヘルトの記憶も、アルフレット城での記憶も全て、俺は、思い出した。

「……どうして、ことなんだよ……まだ、よく、わからない」

『私は、間もなく枯れ果てるであら』

「なんと、メモリアント。随分と弱気になつたものだな」

『アルフィよ、お前は随分と年老いたようだな』

「口が達者なのは相変わらずのようじゃのむ」

ジジイ同士の言いあいに、俺は呆れていた。人の話を聞かないといつところを、アルフィには直してほしいと常々思っていた。俺の疑問に、誰も答えてくれなかつた。イライラしていると、ウヘルトが俺の横にやつてきた。改めてウヘルトを見ると、少し照れた。ウヘルトの顔が、違つて見えた。

「子供の頃の私たちは、なんとも無邪氣だつた。私は、お前を本当の弟のように思つていたのに、簡単に忘れてしまつとは」

「仕方がないだろ。俺は、ウヘルトたちの事を忘れたくて忘れたんだ」

「私はお前が羨ましかつた。城の中しか知らない私は、森に住んでいるお前が羨ましかつた」

「所詮は身分の違いだ。王族と、そうでない俺の違い」

『2人とも、思い出話はそれぐらいにしてもらおう。私の話を聞いてほしい』

「じゃあせつせと話せ！俺はさつきから質問してるだろ！」

俺のイライラを記憶の木にぶつけると、ウェルトは隣で普ッと笑つた。ウェルトの笑顔を見るのは久しぶりだった。子供の頃と変わらない、キレイな顔立ちに浮かぶ、美しい笑顔。

「記憶が戻つても短気は治らないのか」

「これが俺だ！ウェルトイちいかけのやいんだよ！」

今度はウェルトが声をあげて笑つた。それにつられてか、アルフィの顔にも笑みがこぼれた。一瞬でも、この場が和んだのだ。

『それでは本題に入ろう』

記憶の木が言葉を発した瞬間、木の葉が数枚、俺たちの目の前に落ちてきた。青々と茂っている記憶の木には似合わない、茶色く全く水氣のない葉だった。俺とウェルトは、その葉を一枚ずつ手に取つた。

『私は枯れることのない木。かつての英雄、メモリアントが植えてくれた記憶の木。私その他にも、記憶の木は存在する。しかし、その枯れることのない記憶の木が、今こうして、少しづつ枯れ始めている。ちょうど、ヴォルデオがここにやってきた18年前のことだ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677o/>

記憶の森

2010年11月2日12時31分発行